

知の泉を汲んで…

株式会社NTTファシリティーズ総合研究所
EHS&S研究センター 研究アドバイザー
尾形 努

私が日本電信電話公社に入社した当時（1970年代前半）、武蔵野電気通信研究所の正面には噴水のある池があり、その池の傍に石碑が建てられていた。現在、その石碑は武蔵野研究開発センターの本館1階奥に移設され、研究者達を見守るようにひっそりと鎮座している（写真）。それには、1948年に発足した電気通信研究所（NTT研究所の前身）の初代所長である、吉田五郎氏が掲げた「知の泉を汲んで研究し実用化により、世に恵を具体的に提供しよう」という言葉が刻まれている⁽¹⁾。同氏は、「実用化」という言葉とともに、「具体的」という言葉も使って、研究成果を具現化して世に提供することにより、社会の繁栄に貢献するという強い思いを言い表した。時代の変遷とともに様々な価値観が変容していく中で、石碑に刻まれた精神が当社においても末永く継承されていくことを願う。

石碑に刻まれた言葉の中で、最も肝心なのは「知の泉」であろう。私は「知の泉」とは「知恵」や「知識」が、地下から水が際限なく湧き出てくるようなイメージを持っている。そして、それは自然にまかせておけばいいというものではなく、仕事に携わる人達の日々の研鑽によって「知の泉」が湧き出てくると思っている。ただし、今後は、人が有する「知識」については、ビッグデータ分析や検索技術などの発達により、コンピューターなどの「機械」が担っていくことが予想されるので、汲めども枯れぬ「知恵」の「泉」を持つことに重要性が移っていくのではないだろうか。

渡部昇一氏は、このような「泉」を持つことを、「リソースフル resourceful」という言葉、すなわち発想の豊かさを表わす言葉で言い表している⁽²⁾。では、「リソースフル」になるにはどうしたらよいか。

いくつかの方法が提示されている中に、発想の「井戸」を掘り、しかもそれを複数掘ることを推奨している。その例として、坪内逍遙と森鷗外の文学論争（没理想論争）を挙げている。この論争で、「森鷗外が優勢であった理由は森鷗外が英語とドイツ語の二か国語に堪能であったのに対し、坪内逍遙は英語のみであったためである」という説を紹介している。当時、世界で最も多くの有力な哲学者をかかえていたのがドイツであり、これを背景とした発想の「井戸」を持っていた森鷗外のほうが論争を有利に進めたということらしい。

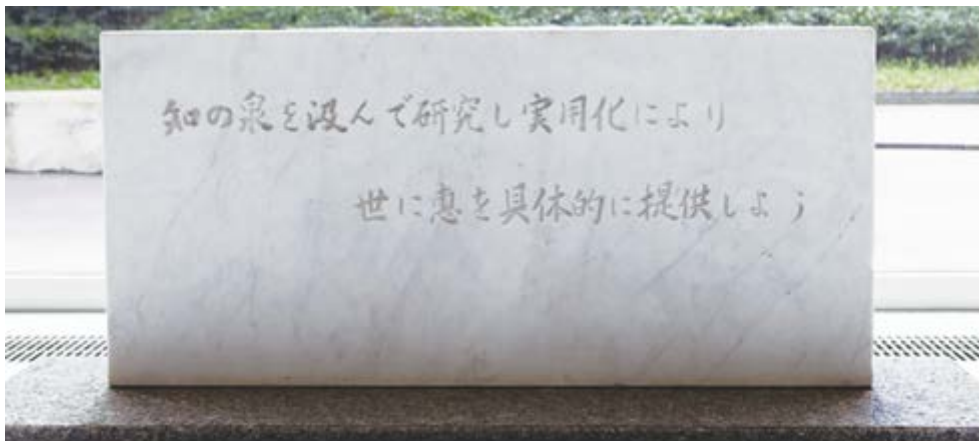
また、「井戸」が枯れそうになったら、休むことも江戸川乱歩を例に紹介している。江戸川乱歩は、作家活動に入ってから、3回も休業宣言をして書かない時期があった。休ん

でいる間に、江戸川乱歩は旅行したり、土蔵のある家に引っ越し独特の書斎を作ったりしたほかに、精神分析研究会に入ったり、ギリシア古典を読み、さらに海外の探偵小説を読み漁ったという。つまり、休みの間に別な「井戸」を掘ったり、「井戸」を休めたりして、その後執筆活動を再開したのである。なお、今年は江戸川乱歩没後50周年で、映画上映や記念出版が行われており、没後もなお、商業ベースの「井戸」は枯れていない。

私は、江戸川乱歩をまねたわけではないが、いろいろな方々にご迷惑をかけながら、50歳代前半に大学に入学し文系の学部を卒業した。理系とは違った世界に身を置くことにより、渡部昇一氏が推奨する別の「井戸」を掘ることと「休む」ことを同時に行ったことになるが、発想の豊かさという点で役に立ったのかどうか、甚だ心もとない。ただ、なんとなくであるが、頭の中のバランスが、わずかによくなったような気がしているのは思い違いだろうか。

ところで、「無知の知」という言葉がある。ソクラテス思想の出発点とされるもので、自分が何も知っていないということを自覚するという意味の言葉である⁽³⁾ ⁽⁴⁾ ⁽⁵⁾。何事も分っていると思った時には、その後なにも有益な情報が入ってこず、その結果知恵も湧かないということなのだろう。

さて、私のコラムは今回で12回目になるが、そろそろ別な「井戸」を掘りつつ、2回目の「休み」に入ることにし、拙い私のコラムを読んでいただいた方々に感謝しつつ、「無知の知」を実践できるかどうかの修行に入ることにする。



写真：1948年に発足した、電気通信研究所（NTT研究所の前身）の初代所長である吉田五郎氏が掲げた言葉「知の泉を汲んで研究し実用化により、世に恵を具体的に提供しよう」<http://www.ntt-labs.jp/saiyo/about/>

【参考引用文献】

- (1) NTT研究所：「NTT研究所」
<http://www.ntt-labs.jp/saiyo/about/>
- (2) 渡部昇一：『発想法 リソースフル人間のすすめ』講談社現代新書 1981年12月
- (3) 田中美知太郎：『ソクラテス』岩波書店 1997年5月
- (4) プラトン著、久保勉訳：『ソクラテスの弁明 クリントン』岩波書店 1991年6月
- (5) 編者 村治能就：『哲学用語辞典』東京堂出版 1979年11月

(2015年3月2日 休筆 尾形努)

※掲載された論文・コラムなどの著作権は株式会社 NTT ファシリティーズ総合研究所にあります。これらの情報を無断で複写・転載することを禁止いたします。また、論文・コラムなどの内容を根拠として、自社事業や研究・実験等へ適用・展開を行った場合の結果・影響に対しては、いかなる責任を負うものでもありません。

ご利用になりたい場合は、当社ホームページの「お問い合わせ」ページよりご連絡・ご相談ください。